

## 大通公園を望む窓辺から

### かいま 垣間見える心

常任理事 北野 明宣

先日、知人の病氣見舞いのため入院先のとある医療機関（老舗の公立病院）を訪れたときのことである。

エレベーターに乗り込んだところ、母親と一緒に小学校低学年（1年生？位）と思しきお嬢ちゃんが乗り込んできて幼い指先で背のびしながらボタンを押した。続いてそのあと、その病院の職員、それもそれなりの職責（〇〇〇長のIDプレート）にあると思しき人物が乗ってきて、胸ポケットからやおらボールペンを取り出し、ペン先でエレベーター階のボタンを押した。病院という場所での不特定多数の人が使うエレベーターの中での行為であったがため何か釈然としないものを感じた。

この後一緒に乗り合わせていた私は、この職員の方と同じ階で降りた。なんとなく気になりこの方の動向を少しの間観察していた。すると病棟詰所の扉を持っていたバインダーで押し開けて、さらには扉の隙間に足を差し入れ押し広げ、そのまま詰所内へと消えていった…何やらいっそうの虚しさを覚えた。この職員の方はどういう理由でこれらの行為に及んだのか判然としない。不潔で感染の危険性があるという恐怖感は了解できるが、だからと言って公衆の面前で自分だけは汚いものから逃れようという考えなのか。ペン先でエレベーターボタンを押すこと、バインダーで扉を押すことには理解することも賛成することもできない。またそのような不潔な状態であると思っっているならば、施設全体で必要な対策を講じるよう職員として努力すべきであろう。

職場の衛生状態が自分の手で触ることを臆するほど不潔なのであろうか。見舞いに来ているほとんどの家族・友人、それに小さな子供さんはそんな不潔な状況であろうとは夢にも思っていない。ましてや、病院施設は衛生面で完備されている場所とっっている。そんな中での今回のエピソードは私の心に何か得体の知れぬ不条理さを想い起こさせてくれた。他山の石として肝に銘じたい。

### 超高齢化社会の到来

理事 恩村 宏樹

超高齢化社会が音を立てて迫りつつある。

2005年に9%だった75歳以上の人口が、2030年には20%に、2055年には27%に増加する。それに伴い15～64歳のいわゆる生産者人口は、66%から51%に減少する。分母となる総人口は、1億2,777万人から8,993万人に減少する。

北海道はどうかといえば、2005年の段階で、すでに、東京・大阪・神奈川・愛知といった大都市を有する都府県に次いで、全国第5位の高齢者多数地域となっている。

また、高齢化の進む北海道の自宅死率は約9%弱で、全国44位と低い(ちなみに、北海道より低いのは、福岡・熊本・佐賀の3県のみ)。「住み慣れたわが家の畳の上で死ぬのが幸せ」とはよく言うが、現状は10人のうち9人が病院で最期の時を迎えているのである。しかし、高齢化が進めば、当然、死亡者数も増えるわけで、年間死亡者数は、現在の約100万人に対して、ピークを迎える2040年には約160万人になると言われている。このような状況では、病院で受けきれなくなるのは明白であり、それをどのようにしていくかは、深刻かつ喫緊の課題と思われる。

医療側からみると、診療所外来利用者数は2025年に505万人/日とピークを迎え、その後減少していく。にもかかわらず、診療所医師数は、2050年まで増え続ける。従って、今までのように、外来で患者を待っているだけの診療では経営が困難になる可能性が高く、在宅看取りを含めた在宅診療に目を向けていかなければいけない時期が目前に迫ってきているのではないと思われる。

日本は世界に冠たる長寿国である。しかし、それが、少子化と相まって、超高齢化社会を作り上げたという皮肉な一面もある。お年寄りが、「長生きしなければ良かった」などと言うことのない社会、誰もが健康で幸福な天寿を全うできる社会を作り上げることなど、本当にできるのだろうか？私も自立した老後を送るために、今から考えておかなければいけないのだろうか…？

